

山を育てる 仲間たち



012

京極町林友会

KYUUGOKU-CHOU RINYUUKAI

強度の高い道産カラマツ材の産地・羊蹄山エリアの林業グループ。平成15年度全国林業グループコンクール林野庁長官賞、令和2年に北海道林業グループ協議会創立60周年記念の北海道森と緑の会理事長表彰を受賞。



活動の柱は「山」「人」「地域」をつくること。 研修で視野を広げ、次の世代に森を守る心を手渡し。

学び続けて30余年、向学心はまだまだ旺盛

京極町林友会の設立は平成元年。木材市況の低迷、経営意欲の減退、伐採跡地の拡大、後継者不足と、山積する課題を背景に、林業普及指導員の助言から北海道指導林家の佐々木力男さんが旗振り役となって、町内の森林所有者に林業グループ設立を呼びかけました。長く活動できる会をつくりたいとの思いから、急がずコツコツと趣旨や活動内容の賛同者を増やし、始動から2年をかけて設立に至りました。

「限りなく残ふるさとそう故郷にこの緑」をスローガンに掲げた活動は、研修会や木工教室の実施、啓発運動など多岐にわたります。技術と知識を培い、会員の6名が北海道指導林家です。会員の関心や希望をもとに相談して毎年夏には視察研修を行い、道内外を問わず足を運び、先進地の事例に直接触れて学びを深めています。



意欲あるシニア世代にも 技術を伝授

深めた知見を次代に手渡すため、平成3年に地元開催の北海道植樹祭を機に結成した京極小学校の緑の少年団に、植栽や下刈り、枝払いなどを体験指導。結成



時から息の長い活動は30年を超え、森を守り育てる心を伝えた子どもたちは300名を超えました。また、旭川市に昨年度開校した北海道立北の森づくり専門学校第1期生の地域学習も受け入れ、若き技術者の卵たちは、森林所有者の目線という新しい視座を意識できたこと語り、同会会員を喜ばせました。

現在、会員は48歳～87歳の15名。平均年齢72歳で高齢化は恒常的な課題ながら、17年前には京極町に山林を持つ札幌市在住者3名が新入会しています。同会の活躍を耳にし、自身の森を整備する技術を身につけようと参加したといいます。「後継者」の言葉からは子どもや若者がイメージされがちですが、時間的・経済的にゆとりのあるリタイア層も森づくりの重要な担い手。同会の世代移行はゆっくり進んでいます。